

「五家荘」の由来（五家の荘に伝わる昔話から）

私たちが住んでいる「五家荘」という名前がどうしてそう呼ばれるようになったのか、皆さんは知っていますか？実は、今から800年ほど前のことです。平清盛（たいらのきよもり）の孫にあたる清経（きよつね）は、壇ノ浦の戦いに敗れてから5人の家来と一緒に四国に逃げ、そして九州の大分県へと渡り一年ほど湯布院で暮らしました。竹田藩の殿様である緒方実国（おがた さねくに）から自分のところで暮らさないかという手紙をもらったことが縁で、竹田藩の緒方家で暮らすことになりました。数年たったとき誘ってくれた実国が重い病気にかかりました。もうすぐ死ぬと悟った実国は、清経を枕元に呼びました。

「源氏が生き残っている平家を一人残らず殺してしまう落人狩りが続いており、この場所も危ない。あなたさえよければ名字を緒方に変えて鹿児島に逃げ、もう一度平家の時代を作ってください。ついては、私の娘も一緒に連れて行ってください。」と言い終わると同時に息を引き取りました。しばらくして、清経は実国の娘であるお姫様を妻に迎え、名前を「緒方清国（きよくに）」に変えて竹田藩を離れました。やがて蔵岡という所を通り過ぎようとしたところで山賊50人に取り囲まれてしまいました。勇敢に立ち向かい、たちまち10人ほどを切り伏せ、15人の山賊を捕らえました。他の山賊たちは清経たちのあまりの強さに驚き、残りはとうとう逃げ出してしまいました。清経たちが捕まえた15人の山賊を切り捨てようとした時、どこに隠れていたのか、どっしりした体つきの男が慌てて出てきました。「私は山賊の頭、数馬（かずま）と申すものでござるが、ただ今、私の手下どもが無礼をいたしまして申し訳ございません。」と丁寧にお詫びして、手下の命を助けてくれるように何度も何度も頼みました。清経は、「よし、お前の手下を思う心に免じて許してやろう。」そう言って生け捕りにした15名全員を数馬に引き渡しました。数馬はたいそう喜びました。

「あなた様は名のあるお方とお見受けいたします。訳があってこのような山深い地にお出でになったのでしょうか。さしつかえなければ訳をお話しくだされ、およばずながら力になります。」

清経はすぐには返事をしませんでした。数馬は源氏の回し者かもしれません。回し者ではないにしても、いつ密告されるかもしれません。「私は山賊です。悪い人間です。けれども、手下どもを助けていただいた、あなた様のお力になりたいという気持ちに嘘はございません。」とうとう数馬の真剣な様子に清経も心を動かされ、身分を明かし、旅の目的も話しました。数馬は清経の話をもっと聞き終わると、ふところから地図を取り出しました。「どうぞ、ご安心ください。あなた様方が安心して住めるところをお教えいたしましょう。」数馬は、清経たちを南の白鳥山の麓へと案内しました。そこは、谷も深くビョウブを立てたように切り立った険しいと

ころでした。清経は、白鳥山の頂上に立って住むところを決めるために、東西南北を見渡しました。すると、遙か下に5つの窪んだところが見えました。どこが一番安心して住める場所なのか、清経は矢を放って決めようと考え、神様にお祈りをしました。すると、どこからか白い鳥が飛んできて、すぐ近くに5枚の羽を落としていきました。清経は5本の矢を作り、その矢に白い羽をつけて空に向かって、パシッと放ちました。一の矢は、もみの木に当たりました。そこで、その地を「樅木」と名付けました。二の矢は、仁田のイノシシのしっぽに当たりました。そこで、その地を「仁田尾」と名付けました。三の矢は、白い羽が取れ、どこへ行ったのか分からなくなったので、仁田尾の土地と樅木の土地の一部をはぎあわせて（つなぎあわせて）「葉木」と名付けました。四の矢は、岩の間に飛んでいって分からなくなりました。そこで、子孫が幾久しく連なるようにと「久連子」と名付けました。五の矢は、シイの大木に当たりました。そこで、その地を「椎原」と名付けました。このようにして5つの集落の名前が付けられ、この五つをまとめて五家荘と呼ばれるようになったとされています。